様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５３７

研究課題名（和文）日本語の何が心の理論の発達を決定づけるのか

研究課題名（英文）What in Japanese affects the development of Theory of Mind?

研究代表者
鈴木　孝明（SUZUKI, Takaaki）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０３２９９２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　心の理論と言語発達には密接な関係があることが広く認められている。特に、心的状態語は心の理論の発達において重要な役割を担うと提案されてきた。本研究課題では、日本語を対象として、心的状態動詞の本質を探り、それが日本語母子によってどのように使用されるのかを英語との比較によって調査し、心的状態動詞の統語的特性が日本語獲得児の心の理論発達にどのように影響するのか探った。
　調査の結果、日本語獲得児においては、心の理論発達だけでなく、心的状態動詞の補文獲得も英語獲得児よりも遅いことがわかった。しかしながら、これらの発達は独立的に起こり、その間には因果関係がない可能性も考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　心の理論に関して、言語学的視点から調査した実証的研究は日本語では少なく、特に心的状態動詞の統語的側面に焦点を当てた研究は皆無であった。よって、日本語獲得児における心的状態動詞の使用状況やこれに関わる補文獲得の遅れを明らかにしたことは、心の理論発達研究に対しての大きな貢献であると考えられる。
　また、心の理論は保育や教育の現場での関心事でもあることから、本研究課題の成果は、現場の保育者や教師にも重要な意味を持つ可能性は高い。たとえば、心の理論の発達が遅いとされる自閉症児など障害をもつ子どもの支援や指導、また、人の気持ちを理解するための教育の基礎研究として、これらに貢献できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：　It is widely acknowledged that Theory of Mind (ToM) is closely related to language development. In particular, mental state terms are considered to play a substantial role in the development of ToM. In this research project, we investigated the nature of Japanese mental state verbs, how they are used by Japanese-speaking mother-child dyads compared to English-speaking ones, and how mental state verbs and their syntactic properties affect the development of ToM in Japanese-speaking children.
　The results showed that Japanese-speaking children's understanding of tensed complements under mental state verbs develops much later than English-speaking children, and the developmental delay of ToM widely observed among Japanese children may be due to their incomplete acquisition of the complement clauses. However, our analyses also revealed no correlation and no directionality between them; therefore, there may be no causal relationship between them.

研究分野：言語学

キーワード：言語発達　心の理論　心的状態動詞　日本語　補文

１．研究開始当初の背景

心の理論 “Theory of Mind” は、心的状態を自己や他人に帰属する認知能力で、その発達と言語の発達には広く相関関係が認められている (e.g., Milligan et al., 2007)。英語を母語とする幼児の場合、心の理論を調査するための誤信念課題に通過するのは 4 歳頃だとされているが (e.g., Wellman et al., 2001)、日本語を母語とする子どもは、この通過が 1～2 年程遅いことが報告されている (e.g., Naito and Koyama, 2006)。もし言語が心の理論の発達を引き起こす要因の 1 つであれば、日本語獲得児における心の理論の発達の遅れは、日本語に原因があるはずである。

これまで、日本における心の理論の発達研究は、心理学の分野が主導してきた。しかし、心の理論の発達と言語発達との相関関係が広く認められている現状を踏まえると、言語学的知見をとり入れた研究によって明らかにされるべき問題が数多く存在すると考えられる。また、日本語獲得児における心の理論の発達に関する遅れはしばしば指摘されるものの、その要因は明らかにされておらず、心理学ベースの研究の多くが「文化差」という曖昧な原因を指摘するに留まっている。

本研究課題では、言語学的な視点から心の理論の発達を探ることで、他言語において提案されてきた言語的要因の検証を行う。また、日本語の発達がどのように心の理論の発達に貢献し得るのか、日本語独自の要因についても調査を行う。このようなアプローチは、日本語という個別言語における要因の特定化だけでなく、言語普遍的な要因の特定化につながる可能性も含んでいる。他言語で発見されていない要因が、日本語を通してのみ表面化し、それが、言語一般に当てはまる可能性があるからである。日本語の研究を基盤として、分野全体に新たな問題や提案を発信できるかもしれない。

２．研究の目的

日本語獲得児における心の理論の発達を言語学的に探り、心の理論の発達に関わる言語的要因を明らかにすることを目的とした。具体的には以下 3 点に集約される。

(1) 日本語において、心の理論の発達に関わる要因の候補を浮き彫りにすること。これに関して理論的検証を行い、言語普遍的な要因と個別言語（日本語）に特有な要因を区別し、日本語において、心の理論の発達に関する言語的側面の理論的基盤を構築する。

(2) 母子の自然発話分析を通して、上記１にあげた要因の頻度とその使用状況を特定すること。その結果をもって、これらの要因が心の理論の発達に貢献しうるかどうかを検討し、日本語獲得児にとって心の理論の発達が遅れる要因を検討し具体的な提案を行う。

(3) 幼児を対象とした行動実験を通して、誤信念課題に使用するストーリーや質問文の影響を明らかにすること。特に、語順、動詞、項構造などの要因を統制し、これらがどのように被験者の反応に影響を与えるか調査を行い、心の理論の発達や遅れとの因果関係を探る。

３．研究の方法

<u>心の理論の発達に関わる要因候補の選定</u>

「心の理論の発達に関わる要因候補の選定」は心的状態語の分析から始めた。これは、心の理論の基盤となっている心的状態把握能力の発達には、言語インプットとして子どもに与えられる心的状態語が影響を及ぼすという先行研究の提案に基づくものである。まず、英語による既存の心的状態語リストを用いて日本語の対応リストを作成し、統語カテゴリーによる分類を行った。これまでの研究では、心的状態語の意味のみに焦点が当てられていたため、統語的にこれらの語が分析されることはなかった。次に、この中から内項をとる心的状態語を抽出し、さらに補文をとる可能性があるものを心的状態動詞と呼んで発話分析の対象とすることにした。これは、英語と同様に日本語でも、心的状態動詞の補文に埋め込まれた命題は、それだけでは論理的に内容の真偽を決定することができないという特徴を持ち、これが誤信念を表す言語のひとつの形式となっているからである。これまでも、de Villiers (2000, 2005)らの提案により、定形補文の獲得が心の理論の発達に寄与する可能性が提案されていたが、本研究では日本語においてこの可能性を追求することにした。さらに、日本語の特徴として項の省略があるため、このことが子どもの補文理解に関係している可能性も探ることにした。

<u>母子の自然発話分析</u>

母子の自然発話分析は、CHILDES データベースの中から日本語の Okayama データと英語の Gleason データを用いて、日本語の心的状態動詞と英語の心的状態動詞を分析した。日本語データは、130 名の 2 歳から 4 歳児とその親が対象で、子どもの発話は約 26,000、親の発話は約 36,000 であった。英語のデータは日本語よりも少なく、24 名の 2 歳から 5 歳児とその親を対象としたもので、発話数は、それぞれ約 3,700 と 5,000 であった。

具体的な分析方法は、それぞれの言語において、子どもと親の心的状態動詞の頻度とそれを使用した人数の割合を算出するというものである。各言語において、子どもによる心的状態動詞の使用が親のインプットの影響を受けているのかどうか分析を行った。また、日本語の心的状態動詞がどのように使用されているのかを詳細に分析するため、「信じる」「知る」「わかる」「思う」「考える」という 5 つの語に焦点を当てて、それらがどのように使用されるのか動詞の下位範疇化のパターンに照らし合わせて統語的な分析を行った。さらに、日本語に対応する英語の心的状態動詞についても同様の分析を行い、それぞれの母子間の比較と言語間による比較

を行った。

幼児を対象とした行動実験

幼児を対象とした行動実験に関しては、補文課題と誤信念課題の両方を同一被験者に対して実施し、その結果を比較する方法をとった。補文課題とは、絵を用いて特定の状況を示しながら、“What did mother think she bought?” のような質問をして答えさせる課題であるが、このとき示す絵には、母親が実際に買ったものと母親が買ったと思っているものが異なるという状況が描かれている。英語を母語として獲得する子どもの場合、4 歳以前では補文課題に正解することが難しいと報告されており、この課題ができるようになるタイミングが心の理論をテストする誤信念課題の正解と相関関係にあることが報告されている (e.g., de Villiers, 2005, 2009)。

本研究でもこの 2 つの課題を行い、日本語獲得児の心の理論の発達を探ることにした。実験は全部で 3 回にわたって行った。最初に 3 歳児 14 名を対象とした補文課題を予備調査として実行した。つづく本調査では、4 歳児 24 名と 5 歳児 20 名を対象とした。両課題とも、コンピュータのディスプレイに絵を示して、実験者がスイッチ操作で場面を変えていくものを作成し、そこで使用する絵にも改良を加えていった。誤信念課題では、サリーとアン課題（物体移動の課題）とスマーティー課題（予期せぬ中身の課題）を実施した。また、その後の再調査では 5 歳児 18 人と 7 歳児 18 人を対象に実験を行ったが、この際、補文課題に改良を加えた。

４．研究成果

ここでは「研究方法」に示した 3 点について、それぞれの研究成果の報告を行い、最後に総合的なまとめを行う。

心の理論の発達に関わる要因候補の選定

言語学的視点に基づいた理論的考察から、心的状態語のなかでも、とりわけ心的状態動詞が心の理論の発達に重要な役割を担うという結論に達した。心的状態動詞には、統語的に補文構造を内包するものがあり、これが自己および他者の信念を表す言語形式となる。補文によって表現されるこの命題は、その真偽をそれ自体で決定することはできないという「命題の不透明性」という特徴をもっており (e.g., Quine, 1961)、これが誤信念の理解にかかわってくると考えられる (de Villiers, 2000; de Villiers & Pyers, 2002)。よって、誤信念課題を指標とする心の理論は、日本語においても、命題の不透明性をもつ心的状態動詞の獲得、および、誤信念を表現する定形補文の獲得によってその発達が引き起こされるのではないかという仮説をもとに調査を進めることにした。また、日本語独自の特徴として、項の省略や語順の多様性が考えられることから、これらも日本語獲得児による補文の獲得に影響を及ぼす要因として調査を行うことにした。

母子の自然発話分析

自然発話分析に関しては、まず日本語における心的状態語リストを作成し、その統語的特徴に基づいて 19 語の心的状態動詞を選定した。また、これに対応する英語の心的状態動詞 22 語を選定して、これらの使用頻度と使用人数の割合を算出した。その結果、子どもの心的状態動詞の産出と親のインプットには、全体的に正の相関が認められたことから、子どもは親のインプットの影響を強く受けていることが日本語と英語の両言語で確認された。しかしながら、心的状態動詞の中でも思考動詞に限っては、親のインプットと子どもの産出に大きな隔たりが見られた。このことは、インプットのみが産出に影響を与えるのではなく、概念発達の影響や統語発達の影響が存在する可能性を示唆している。

次に、定形補文をとる日本語の心的状態動詞「信じる」「知る」「わかる」「思う」「考える」とこれらに対応する英語の心的状態動詞に焦点を当てた分析を行った。これらの心的状態動詞の頻度は、全体として英語の方が日本語よりも高かった。また、１万語あたりの頻度を語彙ごとに比較した統計分析では、表１に示すように、子どもの産出と親のインプットの両方において、「信じる」、「知る」、および「思う」などの思考動詞は、英語の方が日本語よりも頻度が高いという結果が得られた。このことは、英語獲得児の方が日本語獲得児よりも心的状態動詞のインプットを多く受け取り、使用頻度も高いことを示している。

また、心的状態動詞の実際の用法を内項の下位範疇化のパターン（定形節と省略）に照らし合わせて算出し、50 語あたりの頻度で示したものが表 2 である。ここからも明らかなように、定形節は英語の方が日本語よりも頻度が高かったが、省略は日本語の方が英語よりも頻度が高かった。これは項の脱落を許す日本語とそれを許さない英語の違いに起因するが、このことが心的状態動詞の使用の違いにも如実に現れていることは大変興味深い。

表 1. 1 万語あたりの心的状態動詞の頻度

	日本語		英語	
	子ども	母親	子ども	母親
信じる／believe	0.00	0.00	1.45	3.00
知ル／know	18.17	12.48	49.38	66.24
わかる／understand	5.09	6.78	0.73	3.33
思考動詞（思う／think など）	1.38	5.43	18.15	64.90

表 2. 心的状態動詞 50 語あたりの定形節と省略の頻度

	日本語		英語	
	子ども	母親	子ども	母親
定形節	3.09	10.31	19.64	27.48
省略	33.43	20.33	3.57	2.68

定形補文の使用について子どもの年齢による推移を分析したところ、英語の場合は年齢が上がるにしたがって親のインプットパターンに近づき定形節が増えることが観察された。一方、日本語の場合は、図 1 が示すように、親の定形補文の使用は子どもの年齢上昇にともない増加しているが、子どもの使用は増えていない。ここには、親のインプットと子どもの産出に大きな隔たりが存在することがわかった。

以上、母子の自然発話における心的状態動詞の使用分析結果から、日本語と英語における相違点は以下 2 点に集約できる。第一に、日本語を母語として獲得する子どもは、英語獲得児と比べると、心的状態語のインプットが少ない。第二点目として、日本語には個別言語の特徴として補文の省略があるため、子どもは定形補文を使わないし、たとえ親からインプットが与えられてもそれにしたがわない。このことは、誤信念を表す言語形式である定形補文の発達が遅いことを示唆しており、これが日本語獲得児の心の理論の発達の遅れを引き起こす要因である可能性が考えられる。

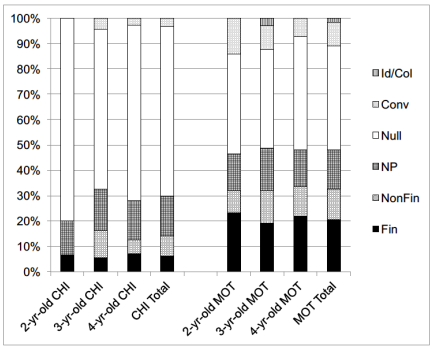

図 1. 日本語における心的状態動詞の下位範疇化パターン

注: Fin = 定形; NonFin = 非定形; NP = 名詞句; Null = 省略; Conv = 決まり文句; Id/Col = 熟語や定型表現

<u>幼児を対象とした行動実験</u>

母子の自然発話分析の結果から、日本語を獲得する幼児は、同年齢の英語獲得児と比べて補文課題に困難が生じることが予測される。また、もし英語と同じように日本語でも定形補文の獲得が心の理論の発達に効果をもたらすならば、英語獲得児より遅い年齢で、日本語でも補文課題と誤信念課題の結果に正の相関が見られるはずである。これらのことを確かめるために、幼児を対象とした行動実験を行った。

まず、補文課題の予備調査を行い、3 歳児に補文課題が困難であることを確認した後、本調査における対象年齢を 4 歳児と 5 歳児に設定し、補文課題と誤信念課題を実施した。補文課題では、以下に示すような 4 タイプの質問文を使用して、文構造の影響と動詞の影響を調査した。

（１）女の人は何と言ったのかな。（単文／伝達動詞）
（２）女の人は何と思ったのかな。（単文／思考動詞）
（３）女の人は何を見つけたと言ったのかな。（複文／伝達動詞）
（４）女の人は何を見つけたと思ったのかな。（複文／思考動詞）

英語では 4 歳頃から補文課題の理解が可能になり、それに伴って誤信念課題も理解できるようになる。心の理論の発達が英語獲得児よりも遅れる日本語では、5 歳ごろから補文課題の理解ができるようになるのではないかと予測した。しかし結果は予測とは異なり、日本語を獲得する 4 歳児は、どの条件においても 8 割以上の正解率を示し、5 歳児の正解率は 9 割を超えた。また、条件による統計的な有意差は見られなかった。一方、誤信念課題の結果は、先行研究の報告と概ね合致するもので、4 歳児の通過率は 50%未満で、5 歳児になると上昇した。これらの結果は、日本語では補文課題は 4 歳でも正解できるが、誤信念課題は 5 歳でも困難な場合があり、補文の理解と誤信念の理解に相関関係がないことを示している。しかしながら、このように結論づけるのは性急だと考えられるような反応も見られた。補文課題では、補文の内容と事実が異なる状況を設定して実験文を与えたが、回答が一定のパターンにならないように真実質問文（例，女の人は何を見つけたのかな）をフィラーとして用いた。ここに困難が生じることは全く予測していなかったが、実際には多くの被験者がこれを誤って解釈することがわかったのである。その原因が課題の提示順序にあるのか、絵における特定の物体の目立ちやすさにあるのか不明であるが、いずれにしても実験のアーティファクトだと考えられることから、次の調査でこの点を改善して再び補文課題を行うことにした。

再調査では以下(5)と(6)に示すような実験文を使用した。

（５）a. 女の人は自分が何を拾ったと思ったのかな。（主節と補文の主語が一致する文）
　　b. 女の人は何を拾ったのかな。（真実質問文）
（６）a. 女の人は男の人が何を拾ったと思ったのかな。（主節と補文の主語が一致しない文）
　　b. 男の人は何を拾ったのかな。（真実質問文）

ここでは、実験文(a)と真実質問(b)をペアで用い、真実質問をコントロールとして、これに正答した場合のみ実験文を採点するという分析方法を採用した。またターゲットとなる実験文や真実質問を行う際、その順番はカウンターバランスをとり、提示する絵には候補となる物体のみを示して、特定の人物と結びつかないようにした。さらに、前回の調査で効果が見られなかった文構造（単文／複文）と動詞（伝達動詞／思考動詞）を要因から除き、その代わりに主節と補文の主語に関する要因（一致／不一致）を新たに加えた。これは、補文と主節の主語が一致する場合、日本語では通常、補文の主語が脱落するため、明示的に示されない補文の主語が正確に理解されているのかどうか判断できないと考えたためである。このような主節と補文の主語が一致する文と一致しない文を比較することで、視点の移動という視点からも心の理論との関連を考察できるのではないかと考えた。被験者の年齢は誤信念課題に通過し始める 5 歳児と、すでに誤信念理解が可能だと思われる 7 歳児を比較することにした。

結果は表 3 に示す通りで、主語の一致／不一致に関する効果は統計的に認められなかった。そのいっぽうで、年齢には有意差が認められ、7 歳児の正解率は 5 歳児の正解率よりも高いことがわかった。また、それぞれのグループにおける正解率をチャンスレベルと比較したところ、7 歳児はチャンスレベルよりも有意に高かったことから、補文課題が理解できるのは 7 歳児であると考えられる。誤信念課題に関しては、それぞれの課題のコントロールとなる質問に正解した被験者を対象として、誤信念質問に正解した被験者を合格者とし、その数と割合を表 4 に示した。数値的には、サリーとアン課題の方がスマーティー課題よりも合格者人数は多かったが統計的な差はなかった。よって、すべての正解数を合計して、年齢ごとに正解率をチャンスレベルと比較したところ、5 歳児では有意差はなかったが、7 歳児ではチャンスレベルよりも有意に高いことがわかった。補文課題同様、誤信念課題においても、これが理解できるのは 7 歳児であることがわかった。

表 3.　補文課題の正解率

	主語一致	主語不一致	全体
5 歳児（n=14）	41.7%%	51.4%	46.5%
7 歳児（n=18）	90.3%%	88.9%	89.6%

表 4.　誤信念課題の合格人数と合格率

課題	誤信念タイプ	5 歳児	7 歳児
サリーとアン課題	他者	88.2% (15/17)	100% (16/16)
スマーティー課題	他者	63.6% (7/11)	92.9% (13/14)
	自己	45.5% (5/11)	78.6% (11/14)

*カッコ内が人数

次に 2 つの課題の関連性を探るため、それぞれの課題に合格点を定めて、その通過人数と年齢を調査した。補文課題では 8 問中 7 問以上正解した被験者を合格者グループ、それ以外を不合格者のグループとした。誤信念課題では、コントロール質問が 1 つでもできなかった被験者を除外した上で、信念質問にすべて正しく答えた合格者グループと信念質問に不正解があった不合格者グループに分けた。結果は、表 5 に示すように、両方の課題に合格した被験者が 9 名（平均年齢＝7 歳 3 ヶ月）で、両方とも不合格だったのは 3 名（平均年齢＝5 歳 11 ヶ月）だった。また、どちらかの課題に合格し、もう一方に不合格だった被験者は合計 9 名いたが、その分布からどちらか一方の課題が他方よりも難しいというような方向性は見られなかった。さらに、両方の課題の相関を分析するため、誤信念課題と補文課題の合否に関してピアソンの積率相関係数を算出したが、そこに相関関係は見られなかった（r = .289, p = .087）。

表 5.　2 つの課題の合否人数と平均年齢

	補文課題合格者	補文課題不合格者
誤信念課題合格者	9 (7;3)	4 (6;0)
誤信念課題不合格者	5 (6;5)	3 (5;11)

これらの結果を総合的に考察すると、日本語獲得児にとっては定形補文の理解も誤信念の理解も 5 歳児では難しく、それぞれの課題に正解できるようになるのは 7 歳ごろだと思われる。しかしながら、この 2 つの課題の理解に相関関係は認められなかったことから、日本語獲得児の場合は、それぞれの理解は独立して発達する可能性があると考えられる。

最後に、誤信念課題の一部として行った信念質問文の理解実験では、幼児を対象として基本語順の文(7)、補文の移動を含む文(8)、分裂文(9)を使用したときの正解率を分析したが、そこに正解率の差は認められなかった。

（７）けん君はどこにアメがあると思っているのかな。（基本語順）
（８）どこにアメがあるとけん君は思っているのかな。（補文の移動）
（９）けん君がアメがあると思っているのはどこかな。（分裂文）
（１０）けん君はアメがどこにあると思っているのかな。（補文主語の移動）
（１１）どこにけん君はアメがあると思っているのかな。（wh の移動）

しかしながら成人を対象として、補文主語の移動を含む文(10)と wh 移動を含む文(11)を加えてオンライン実験を含めた調査を行ったところ、基本語順の文(7)が最もやさしく、補文の移動を含む(8)の文や wh 移動を含む(11)の文はこれよりも難しいという結果が得られた。このことは、言語獲得の過程にある子どもの誤信念を調査する場合は、質問文の影響も十分に考慮する必要があることを示唆していると考えられる。

以上のように、今回の研究課題では、言語学的、特に統語的な分析に基づいて心的状態動詞とその補文に焦点をあてた調査を行った。今回の日本語獲得児を対象とした調査によって、これまで多くの研究調査が行われてきた英語とは異なる多くの事実が明らかになった。その中でも特に重要な発見は、誤信念を表現する統語形式である定形補文の発達が日本語では遅いということである。項の脱落を許す日本語では、補文が明示的に示されるインプットが少ないことが自然発話分析によって明らかになった。また、これが子どもの発話にも影響を及ぼし、たとえ親のインプットが増えても、子どもの発話における補文は増加しないこともわかった。これらの結果は、学会発表において随時報告してきたが、その詳細をまとめた論文を現在、国際的なジャーナルに投稿中である。また、このような補文獲得の遅れは、実験調査によっても確認された。日本語は英語とは異なり 5 歳児段階での補文獲得が難しいという結果は、大きな発見である。日本語獲得児による心の理論発達の「遅れ」が、補文獲得に起因している可能性が考えられるからである。しかしながら、補文課題と誤信念課題の結果に相関関係がなかったという現段階での結果は、日本語獲得児における心の理論発達は、補文獲得とは別の何らかの言語ルートが存在する可能性も示唆している。この結果報告と考察は、近々、学会発表という形でまとめる予定であるが、今後も引き続き考察を進めて具体的な提案や仮説を提示したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① 鈴木 孝明 (2018). 日本語における信念質問文の処理と理解『心理学研究』第 89 巻, 403-408 ページ DOI: 10.4992/jjpsy.89.17319（査読あり）

② Nomura, Jun, and Suzuki, Takaaki. (2016). A CHILDES analysis of mental state verbs in Japanese and English.『電子情報通信学会技術研究報告』第 116 巻, 53-58 ページ（査読なし）

③ 野村 潤・鈴木 孝明 (2016). 日本語母子会話における心的状態語の使用実態.『電子情報通信学会技術研究報告』第 115 巻, 13-18 ページ（査読なし）

〔学会発表〕（計　9　件）

① 鈴木 孝明・三浦 優生・小林 哲生 (2018). 日本語の補文理解と心の理論の発達. ヒューマンコミュニケーション基礎研究会･幼児言語発達研究会 2018 年 1 月 26 日, 第一工業大学

② 鈴木 孝明 (2017). 補文の理解と誤信念の理解 言語科学会　第 19 回年次国際大会フォーラム 「言語学的視点から探る心の理論の発達：日本語を中心に」2017 年 7 月 2 日, 京都女子大学

③ 野村 潤 (2017). 日英語の母子会話における心的状態動詞の使用　言語科学会　第 19 回年次国際大会フォーラム 「言語学的視点から探る心の理論の発達：日本語を中心に」2017 年 7 月 2 日, 京都女子大学

④ 三浦 優生 (2017). 間接発話の理解　言語科学会　第 19 回年次国際大会フォーラム「言語学的視点から探る心の理論の発達：日本語を中心に」 2017 年 7 月 2 日, 京都女子大学

⑤ 鈴木 孝明 (2017). 誤信念課題における日本語質問文の処理と理解 ヒューマンコミュニケーション基礎研究会・幼児言語発達研究会. 2017 年 1 月 27 日-28 日, 福岡県なみきスクエア

⑥ Nomura, Jun, and Suzuki, Takaaki. (2016). A CHILDES analysis of mental state verbs in Japanese and English. 思考と言語研究会 Mental architecture for processing and learning of language. 2016 年 7 月 23 日-24 日, 早稲田大学

⑦ 野村 潤・鈴木 孝明 (2016). 日本語母子会話における心的状態語の使用実態 ヒューマンコミュニケーション基礎研究会・幼児言語発達研究会. 2016 年 1 月 22 日-23 日, 奈良県ヤマト会議所

⑧ Miura, Yui. (2015). Children’s developmental ability in pragmatic inference. Young Researchers' Workshop on Mind and Language. 2016 年 7 月 26 日, 共立女子大学

⑨ Miura, Yui. (2015). Autistic children’s use of contextual and prosodic information in pragmatic inference. The 17th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences. 2015 年 7 月 18-19 日, 別府国際コンベンションセンター

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小林 哲生
ローマ字氏名：KOBAYASHI, Tessei
所属研究機関名：日本電信電話株式会社 NTT コミュニケーション科学基礎研究所
部局名：協創情報研究部
職名：主任研究員
研究者番号（8 桁）：30418545

研究分担者氏名：野村 潤
ローマ字氏名：NOMURA, Jun
所属研究機関名：京都女子大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：10571474

研究分担者氏名：三浦 優生
ローマ字氏名：MIURA, Yui
所属研究機関名：愛媛大学
部局名：教育・学生支援機構
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：40612320

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。